

臨床心理・神経心理検査結果を活用した フィードバック面接 実施方法

松田 修「医療機関における心理検査の実施実態と活用可能性に関する研究」
令和5-6年度 厚生労働科学研究費補助金 疾病・障害対策研究分野 障害者政策総合研究
分担研究：松田 修「精神科領域の医療機関における心理検査の活用可能性と有用性に関する研究」

目次

- I 臨床心理・神経心理検査結果を活用したフィードバック面接の概要
 - II 臨床心理・神経心理検査結果を活用したフィードバック面接の対象者
 - III 臨床心理・神経心理検査結果を活用したフィードバック面接の実施者及びその役割
 - IV 臨床心理・神経心理検査結果を活用したフィードバック面接の目的
 - V 臨床心理・神経心理検査結果を活用したフィードバック面接の留意点（基本姿勢）
 - VI 臨床心理・神経心理検査結果を活用したフィードバック面接の進め方
 - VII おわりに
-
- ・参考資料
 - ・参考文献

I 臨床心理・神経心理検査結果を活用したフィードバック面接の概要

(1) フィードバック面接の理解

- ・ 臨床心理・神経心理検査結果を活用したフィードバック面接（以下、フィードバック面接）は、臨床心理・神経心理検査（以下、心理検査）の結果を用いて、患者の自己理解や疾病理解の促進、自己対処や再発予防等のスキル獲得の促進、治療意欲の向上（動機づけ）等をねらいとし、患者に対して面接を行うものである。
- ・ 藤田・熊谷は、編著「心理検査のフィードバック（図書文化社、2022）」において、「検査者と受検者（家族・支援関係者を含む）が、対等な関係のもと、相互に対話をする中で、受検者が自身の特性について理解しつつ、過去の行動や状況の背景を知り、未来の出来事によりよく対処していくために、両者が協働して提案をしていくこと」を定義としている。
- ・ また、フィードバック面接に係る基本的な考え方として、検査のフィードバックは検査を受けた人の権利として、受け取り手に理解しやすく、わかりやすい言葉や方法で、その人の役に立つように実施することが求められる（藤田，2022）。
- ・ 医療機関においては、医師の指示に基づき、公認心理師等の従事者が心理検査を実施、結果を算出した場合、その結果に基づき医師が分析を行い、患者本人や家族等の関係者に適宜結果を説明する。ただし、診療時間内で説明できる範囲には限りがあるため、公認心理師等の心理検査を担当した者が、さらに詳細、丁寧に検査結果を補足、伝える場合がある。

(2) 本ガイドについて

- ・ 本科研の分担研究（松田班）における心理検査フィードバック面接の効果研究は、病院や診療所といった複数の施設が調査フィールドであったため、実施方法が施設ごとに異ならないよう、面接の流れや留意事項等をまとめたガイドを作成し、手続きを統一化した。ガイドの作成に際しては、国立精神・神経医療研究センター病院（以下、NCNP）臨床心理部のフィードバック面接について、流れや留意事項等についてまとめた業務マニュアルを参考にした。NCNP 臨床心理部では、医師の指示に基づき、公認心理師が、心理検査を実施した患者に対し、医師からの結果説明後さらに詳細な検査結果のフィードバックを行う場合がある。
- ・ 研究の結果、本ガイドをふまえたフィードバック面接を行うことで、患者に対しポジティブな影響等がみられた。そのため、他の医療機関において、公認心理師等がフィードバック面接を実施する際の参考資料として提案する。

II 臨床心理・神経心理検査を活用したフィードバック面接の対象者

- ・ 医療機関におけるフィードバック面接の対象者は、臨床心理・神経心理検査を受けた患者のうち、詳細な心理検査の結果説明を希望した患者や、医師が必要と判断した者等である。臨床心理・神経心理検査の対象者については「臨床心理・神経心理検査 実施と活用のガイド」を参照すること。
- ・ 本研究においては、上記に加え、精神科医療機関に通院中の18歳以上の患者を対象とした。
- ・ 临床上では、検査を受けた患者の家族等の関係者や、自他施設の支援者に実施する場合もある。対象者が誰かによって、伝える内容や、伝え方を工夫する必要がある。なお、患者本人以外にフィードバックを行う場合は、事前に患者本人の同意を得ておくといった配慮が必要である。

III 臨床心理・神経心理検査を活用したフィードバック面接の実施者及びその役割

(1) フィードバック面接の実施者について

- ・ 面接の実施者は、心理検査に関わる養成を受け十分な知識及び経験を持ち、心理検査フィードバックの内容や効果、限界点、患者への影響やリスク等に精通した公認心理師等の専門職であることが望ましい。例えば公認心理師は、その養成課程において、心理的アセスメントとして各種心理検査の活用方法を学んでいるが、さらに、適宜学会等の関係団体が実施する研修会に参加するなど、必要な知識技能を研鑽することが望ましい。
- ・ 面接の実施者は、精神疾患、神経発達症などの症状や特性を理解し、治療選択や予後について十分な知識があることが望ましい。例えば公認心理師の場合、精神疾患等を対象とした心理カウンセリングの経験から、症状の改善や回復の過程を事例的に提示することで、患者の治療動機づけを高めるのに有効な場合がある。
- ・ 面接の実施者は通常、当該患者への心理検査の実施を担当した公認心理師等であることが望ましいが、上述通り精通した者であれば検査を実施した者でない場合もある。

(2) フィードバック面接実施者の役割について

- ・ 面接の実施者は、医師の指示に基づき実施された心理検査の結果について、医師からの結果説明を補足する面接を行う。
- ・ 面接の実施者は、フィードバック面接は医師の依頼のもと、支援チームの一員として行うものであることを理解する。
- ・ 心理検査のフィードバック面接は、それ自体が単回の心理面接、心理的支援としての役割もあることを理解する。
- ・ 医師と連携をはかり、治療方向性と不一致がないよう留意してフィードバックする。

IV 臨床心理・神経心理検査を活用したフィードバック面接の目的

フィードバック面接は、単に結果を伝達するだけでなく、検査結果を活用し、①患者の自己理解や疾病理解の促進、②自己対処や再発予防等のスキル向上、③治療意欲の向上（動機づけ）等を目的として行われるものである。

① 自己理解や疾病理解の促進

- ・ 専門用語を用いず、患者にとって理解しやすく、わかりやすい言葉で伝える。フィードバック面接終了後、患者が自分の言葉を使って自分について説明できる程度のわかりやすさ且つ情報量を目指す。
- ・ 本人の得意な側面や、苦手な側面をバランスよく伝える。
- ・ 患者が受け入れられる水準の内容を伝える。本人が自覚するに至っていない心理的力動、欲求、葛藤について伝える際は、日常の意識している行動に置き換えて説明する。
- ・ 面接担当者は、結果すべてを公開することが必ずしも正しいのではなく、伝えすぎることの弊害もあることを理解する。
- ・ 今回示された結果は実施時点のものであり、今後、変化しうるものであること、また結果には個人の全体が反映されているわけではなく、検査場面を通じて捉えられた一側面にすぎないことなど、心理検査の限界も伝える。

② 自己対処や再発予防等のスキル向上

- ・ 一方的な伝達は避け、患者の反応や受け止めに注意を払い、対話の時間を充実させる。
- ・ 普段どのような対応をしているか確認するなど、うまくいっている対処法について整理する。また、対話の内容を踏まえて、患者に役立つと考えられる対処法を助言・提案するなどして、患者が実践しやすい対処法と一緒に検討する。
- ・ 適宜、病気や治療に関する正しい知識（症状や回復の経過、症状が日常生活に与え得る影響、悪化や再発のサイン、対処法等、一般的なこころの健康に関する知識）を情報提供する。
- ・ 今の生活に役立つアドバイス（少しの努力で達成可能な目標）と、もう少し先を見据えた長期的アドバイス（長い経過の中で変化することを目指す目標）とをバランスよく伝える。

③ 治療意欲の向上（動機づけ）

- ・ 本人の弱みや課題だけではなく、強みや対処できている面もテーマにする。
- ・ 相手の「変わりたい」方向に向かう言動（チェンジトーク）を増やし、具体的な行動や対処法と一緒に検討する。
- ・ 治療やリハビリテーション開始前の心理アセスメントでは特に、心理検査の結果と治療目標の設定とをうまく噛み合わせて、患者が抱える問題や課題を整理し明確に伝える。
- ・ 自己理解を深化させ、回復の道筋を共有することで、治療への主体的な関わりの意欲を高める。

V 臨床心理・神経心理検査を活用したフィードバック面接の留意点（基本姿勢）

- ・ ラポールの形成や、相手の話にある程度傾聴し、状況やニーズ等を確認するなど、一般的な心理面接の基本姿勢を意識する。担当者による説明と、相手の話のバランスには留意して実施する。
- ・ 一方的な結果の伝達ではなく、相互交流のなかで、相手の反応や理解度、受容度をアセスメントしながら進める。
- ・ 多くのことを伝えすぎないように、情報過多になりすぎないように留意する。重要なことやポイントを絞って、必要事項を優先的に伝える。
- ・ 無意識的な側面や抵抗が強いと推察される側面は慎重に伝える。その時点において、相手にとって意識化、直面化に繋がるのが望ましくないと推察されるものについては、直接的なフィードバックは避けたり、説明の仕方に気を付けるなど、留意が必要である。
- ・ 患者への結果の説明に際しては、検査の妥当性、機密性等の観点から、説明する範囲（検査項目など）等の定めや推奨事項等がある場合があるため、各心理検査のマニュアル等を参照し適切に行う。
- ・ フィードバックの流れや、伝える順番を工夫する。

（伝える順番の例）

- ◇ 長所や健康的側面など、患者が受け入れやすい点から伝え、その後、課題を伝え対策を検討する
- ◇ 知能検査の数値など、より構造化され、測定対象が明確であったり、患者にとって意識的な側面から伝える
- ◇ 患者が知りたいことや、重点的に対策を検討したい等のニーズがある点からフィードバックする

- ・ 医師と連携をはかり、治療方向性と不一致がないよう留意してフィードバックする。

VI 臨床心理・神経心理検査を活用したフィードバック面接の進め方

① FB 面接申込時の手続き

- ・ 医師の依頼があり、かつフィードバック面接を希望する患者に対し、自施設や所属部署内のルールをふまえ、FB 面接の概要（内容、実施時間、費用など）を説明する。適宜、説明資料（参考資料①）を用いるなど、丁寧なインフォームドコンセントを行う。
- ・ その際、患者がどのような内容を知りたいと希望されているか、ニーズを確認する。また、その患者に詳細なフィードバックを実施するにあたり適切な時期はいつ頃か、どの程度の内容や粒度、伝え方が適切かなど、患者の状態をアセスメントする。
- ・ 患者が上記に同意し、フィードバックを患者が希望する場合には、日程調整等行い、申し込みを受け付ける。適宜、申込書や同意書を用いるなど、円滑に進むよう工夫する（参考資料②）。

（申込書の内容例）

- ◇ 主治医の許可の有無、主治医から聞いた診断名、主治医から聞いた心理検査結果の大まかな内容、フィードバック面接で特に聞きたいこと（選択方式）、当日の流れ、本人の同意署名、等

② FB 面接の流れと時間配分（参考）

時間	内容
5～10分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 患者の体調や近況を確認する。導入として、患者の緊張を和らげるような態度を心がける。 ・ 心理検査実施時に確認した検査の目的について、再共有する。 ・ 主治医に結果をどのように聞いたか、その時どのように感じたかを聞く。 ・ 予約時に“特に聞きたいこと”にチェックした項目を確認する。
20～25分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 患者用の心理検査結果の報告書（参考資料③）を用い、検査結果の概要を説明する。 <p>（説明のポイント）</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇ 本人の得意な側面、意識化できている特徴について説明し、本人の認識と合致しているかを聞く。 ◇ 苦手な側面、多少気づいていたとしても自覚には至っていない特徴について説明する。併せて、検査上はこのような結果が示されているが、自分ではどう思うかを聞く。また、例を挙げるなどして、日常生活でも思い当たる似たような経験はないか考えてもらい、検査結果と日常場面をつなげる。 ◇ FB 面接時に“特に聞きたいこと”として選択した内容と結果を結び付けて説明する。 ◇ 検査結果から考えられる日常生活のアドバイスや今後の課題、回復への一般的な道筋等について伝える。
10～15分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最後に、フィードバック面接を受けた感想、特に心に残ったこと、日常生活に役立ち

	<p>そうなること、これから取り組んでみたいこと等を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フィードバック面接で話し合った内容はカルテを通じて主治医と共有すること、適宜、診察場面でも心理検査結果について話題にしてほしいことを伝える。
--	--

③ フィードバック面接結果を活用する

- ・ フィードバック面接の概要をカルテに記載し、適宜医師や関係スタッフに情報共有する。
- ・ 医師はフィードバック面接で話し合われた内容を診察場面で取り上げ、今後の治療につなげることも可能となる。
- ・ 多職種や地域関係機関との連携などにも適宜活用する。

Ⅶ おわりに

心理検査のフィードバック面接とは、単に検査結果を伝えるだけではなく、心の専門家としての知識やテクニックが必要な、専門的な支援行為である。患者の多様な心の動きをアセスメントし、対応する、心理師としての専門的スキルは必須と言える。例えば、患者自らが心理検査結果のフィードバックを希望したとしても、自身を理解したい反面知りたくない気持ちも抱いていたり、治療目標を明確にしたい反面曖昧なままにしておきたいというように、変化への恐れや抵抗などから、両価的な側面を抱いている場合もある。さらに、そうした複雑な感情が言語的に語られないケースも多い。

心理師の場合、フィードバック面接の際には、そうした患者の心の動きを常にアセスメントして、伝える内容や伝え方を変えている。上記のようなケースでは、患者自身が変化の必要性に気づき、自発的に行動できるよう、エンパワメントを重視した関わり方や、変化への動機を高めるような対話やフィードバックを行うこともあるだろう。全てがマニュアル通りにいかない場合も多々あるため、対応に必要な知識やスキルの向上が必要である。

既述のとおり、心理検査のフィードバック面接は、患者の自己や疾病の理解の促進、自己対処法や再発予防等のスキル向上、治療意欲の向上など、患者にとって治療や生活の質向上に寄与するものである。今後、提供しやすい仕組み作りがなされていくとよいが、そのためには、フィードバック面接を担う公認心理師等の専門職の育成と雇用の双方を促進させることが重要である。心理検査やフィードバック面接の重要性を社会全体で認識し、必要な専門的知識スキルを備えた専門職の育成、実施実態に見合った診療報酬の改正、公認心理師等の専門職の安定した雇用の推進などについて、一丸となってソーシャルアクションを進めていく必要があるだろう。

公認心理師等の専門職は、ひとりひとりが、こうした責務の一端を担っていることを忘れてはならない。

(参考資料)

① フィードバック面接について、患者への説明用の資料（例）

心理検査「フィードバック面接」のご案内	
<input type="checkbox"/> 心理検査フィードバック面接について	
	臨床心理室では、ご本人向けに面接にて検査結果をフィードバックしています。患者様ご自身の希望やニーズに沿って心理検査の結果をお伝えします。当日お渡しする簡易の結果書面を見ながら、ご自身が性格や能力の特徴を振り返り、生活に活かせるように、わかりやすくお伝えします。
<input type="checkbox"/> 料金について	
	****円 がかります。
<input type="checkbox"/> フィードバック面接申し込みの流れ	
	①心理検査を終えた後の診察の際に、医師から結果に関する説明があります。
	②心理検査の結果を心理士からも聞きたい場合は、まず医師にご相談ください。医師とのご相談のもと、医師が面接の必要性を認めた場合に、フィードバック面接のお手続きができます。
	③臨床心理室で、面接日の予約をご相談します。
<input type="checkbox"/> ご留意いただきたいこと	
	・フィードバック面接は心理検査を受けたご本人を対象としています。ご家族などが受けたい場合は、ご本人の同意をいただく必要があります。
	・診断名やお薬については医師の判断が必要になりますので、診察時に主治医にご相談いただいています。

② フィードバック面接の申込用紙（例）

心理検査「フィードバック面接」の申込用紙	
日付 _____	
□フィードバック面接を受けることについて主治医に相談しましたか	
<input type="checkbox"/> はい／許可あり	
<input type="checkbox"/> いいえ／許可なし	
□主治医から聞いた診断名は何ですか	
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; height: 60px;"></div>	
□主治医から心理検査結果についてどのような説明がありましたか？	
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; height: 60px;"></div>	
□フィードバック面接で聞きたいこと	
<input type="checkbox"/> 得意なことや苦手なことについて	
<input type="checkbox"/> 性格の特徴について	
<input type="checkbox"/> 症状の特徴について ……………など	
□フィードバック面接当日の流れについて	
①来院されたら受付をして、〇階の臨床心理室までお越しください。	
②フィードバック面接は約〇分程度です。……など	
留意事項等や当日の流れなどについてご同意いただけたら、下記に署名をお願いいたします。	
署名 _____	

(参考文献)

- ・フィードバック面接の基本を知る
竹内健児「心理検査の伝え方・活かし方」金剛出版
藤田和弘、熊谷恵子（監）、熊上崇（編）「心理検査のフィードバック」図書文化
- ・フィードバック面接の事例を知る
竹内健児「心理検査を支援に繋ぐフィードバック」金剛出版
- ・そもそも心理アセスメントとは？を考える（検査+フィードバックの目的を考える）
鑪幹八郎、名島潤慈「新版 心理臨床家の手引き」誠信書房
- ・フィードバック面接をその後の治療につながるよういかに進めるか、ステップごとの手引き
スティーヴン・E. フィン「MMPI で学ぶ心理査定フィードバック面接マニュアル」金剛出版
- ・治療的アセスメントの方法論について解説
スティーヴン・E. フィン「治療的アセスメントの理論と実践」金剛出版

2025年3月末日

国立研究開発法人

国立精神・神経医療研究センター病院 臨床心理部